

# 旧ソ連におけるラフマニノフのレガシー（１） ：イワノフカにおける彼の仕事

Rakhmaninov's Legacy in the Former Soviet-Union (1)  
: His Works in Ivanova

---

安原 雅之  
YASUHARA Masayuki

The composer Sergey V. Rakhmaninov, who was born in 1873 in Russia, emigrated to the USA after the 1917 Revolution, and died there in 1943. His legacy as a composer was established both in the former Soviet-Union and in the West. In the Soviet-Union, although Rakhmaninov was an emigrant, his political position was justified and his legacy as a great composer who derived his own inspiration from his mother country, especially from the nature of his beloved estate in Ivanovka, was formulated.

This paper attempts to follow the composer's creative process there to realize what Rakhmaninov has actually done there,

本稿は、作曲家セルゲイ・ワシリエヴィチ・ラフマニノフ Sergey Vasil'yevich Rakhmaninov のレガシー、つまり彼の文化的遺産としてのイメージが、旧ソ連においてどのように形成されたかを、作曲家とイワノフカの関係を通して考察する研究の一部である。

ラフマニノフは1873年にロシアに生まれ、1943年にアメリカで亡くなった作曲家、ピアニスト、指揮者である。モスクワ音楽院で学んだラフマニノフは、1891年にピアノ科を大金メダルで、また1892年に卒業作品としてオペラ《アレコ Aleko》を作曲し、作曲科を金メダルで卒業した。また、作曲科を卒業した年には、その後彼の代名詞ともなった代表作、cis-moll の〈前奏曲〉作品3-2を自ら初演して大きな注目を集めるなど、輝かしい音楽活動が開始された。指揮者としても、1904年から1906年にかけてモスクワのボリショイ劇場で指揮者を務めたほか、その後もしばしば自作を中心とするプログラムで指揮を行なっている。

作曲家としてのラフマニノフの作品のほとんどは、1917年のロシア革命を機に祖国を離れる前に作曲されている。亡命後に作曲された主要作品は〈パガニーニの主題による狂詩曲〉作品43（1934年）と交響曲第3番 a-moll 作品44（1936年）など、ごくわずかであるが、亡命後の作品が少ないこと

について、ラフマニノフが「・・・わたしはもう何年もライ麦のささやきも白樺のざわめきも聞いていない・・・」<sup>i</sup>と言ったというエピソードはよく知られている。つまり、彼はロシアの環境から靈感を得て創作を行っていたことを自覚していたのである。また、1931年に、ラフマニノフはスイスの風光明媚なルツェルン湖畔に別荘を建てているが、その別荘は、作曲家自身の名前セルゲイと、妻の名ナタリアの頭文字にちなんで、セナール Senar と名付けられた（セルゲイの se + ナタリアの na + ラフマニノフの r）。そこは、失われてしまったイワノフカの邸宅を思い起こさせるものであったと言われている。つまり、イワノフカは、彼にとって何物にも代えがたい創造の靈感の源であったのだと言える。

ラフマニノフとイワノフカの関わりについて、ラフマニノフ研究における権威である G. ノリスは、ニューグロヴ音楽事典の「ラフマニノフ」の項目のなかで次のように述べている。

彼の思い出の多くは、イワノフカそのものにあると言っても過言ではないだろう。1917年の革命の際にこの地所は完全に破壊されたが、その後復元された。西欧やアメリカでは彼の評判が衰えたかも知れないが、ラフマニノフと彼の音楽への愛情はロシアでは決して揺らいでいない。確かに、ピアニスト、指揮者、そして一般的な音楽愛好家にとって、彼の作品は常に（1930年代初頭の短い禁止を除いて）レパートリーの主要な部分であった。1973年の生誕100年に向けて、1960年代に、ラフマニノフが彼のインスピレーションの多くを引き出した地所についてのさらなる発見によって、関心が高まった。地元のタンボフの歴史家ニーナ・エメリャノヴァは、この地域でのラフマニノフの活動について多くの研究を行っており、ラフマニノフのいとこで義理の姉妹にもあたるソフィア・サティナがアメリカ在住であり、彼女に、地所のレイアウトについての回想を求めることになった。それらに基づき、また、その当時に撮られた写真と合わせて、ふたつの家のうちの小さい方（ラフマニノフが彼の執筆のほとんどを行なった場所）を再建するプロジェクトが開始された。それは1974年までに完成し、1982年6月18日に博物館として正式に開館した。その後、庭園の再建も含まれるように計画が拡張された。その庭園には、フマニノフのお気に入りだった“赤い”並木道も含まれる。（“赤い”というのは、並木道の舗道にレンガが埋められていたからである。）さらにその後、離れ家とガレージも再建され、また1995年9月24日にはメインの邸宅が完成し、正式に一般公開されるようになった。<sup>ii</sup>

ラフマニノフは1943年、第二次世界大戦の末期に亡くなっている。つまり、作曲家としてのラフマニノフのレガシーは、20世紀後半の時期に形成されたのであるが、第二次世界大戦後の世界は、ソヴィエト連邦とアメリカというふたつの超大国の対立によって、いわゆる“冷戦”の時代を迎えることとなった。社会主義国家である祖国ソ連と、資本主義国家の模範となるアメリカ合衆国は、

異なる社会を形成しており、その結果、両国におけるラフマニノフ受容は異なるものとなっていった。

戦後における経済的隆盛を背景に、アメリカではクラシック音楽がブームとなり、ラフマニノフの、特にピアノ協奏曲第2番は「ヒットした」とも言えるほど、広く親しまれる作品となっていった。その派生として、協奏曲の甘美な主題をメロディーとするポピュラー音楽の楽曲が歌われたり、ピアノ協奏曲そのものが大衆的な映画の題材となったりもした。それは、言い換えれば、ラフマニノフの作品が“商品”として消費されるものになっていったことの表れとも言える。<sup>iii</sup>

一方、1917年のロシア革命直後に亡命したラフマニノフは、その後、祖国の土を踏むことはなかった。旧ソ連において、亡命音楽家の扱いはさまざまであったが、ラフマニノフの場合は、第二次世界大戦中に、亡命先のアメリカとソ連が連合国同士であったことからラフマニノフがソ連を支援しており、それが根拠となって戦後のソ連においては、ラフマニノフは政治的に容認されるようになっていた。連合国の一員として、第2次世界大戦で勝利をおさめたソ連では、ヨシフ・スターリン（1878-1953）は国家指導者としての権力が強まり、文化面においても、1948年の、いわゆる“ジダーノフ批判”に象徴されるように、文化の引き締めも行われるようになっていった。そのような状況のなかで、やはり亡命した音楽家であるが、その後祖国に戻っていたセルゲイ・プロコフィエフ（1891-1953）は当局による批判の対象となっていたが、すでに亡くなっており、また亡命したラフマニノフは、ソ連当局による批判の対象とはならなかった。

日本語で読めるラフマニノフの伝記の定番として親しまれてきたN. バジャールノフによる伝記は、原書は“偉人の伝記”シリーズに含まれるもので、1962年に旧ソ連で出版されたものである。そもそも伝記というものは、著者の目を通してある人物の人生の物語をまとめるものであり、伝記によって、つまり著者によって、描かれる人物像に相違があるのは当然の結果とも言える。それが社会主義国家としてのソ連において書かれたものであれば、そこには当局による検閲をくぐったものであると言っても過言ではないだろう。バジャールノフの伝記に著される作曲家は、ロシアの大地のもつ豊かな自然から靈感をうける芸術家のイメージであるが、それがソ連において公的に認められた作曲家像であったとも言えるだろう。

## イワノフカにおけるラフマニノフの仕事

ここでは、ラフマニノフがイワノフカで実際にどのような創作活動を行なったかを明らかにするために、イワノフカにおける彼の仕事に関する情報を、時系列に沿って整理する。

まず、上記のノリスによる記述でも触れられたニーナ N. エメリヤノヴァによる『イワノフカのラフマニノフ』に含まれる「イワノフカにおけるラフマニノフによる自作の仕事」（1891年から1916年までをカバーしている）<sup>iv</sup>をベースに、スレルフォールとノリスが編纂した作品目録<sup>v</sup>と、ベルテンソンとジェイダによる伝記<sup>vi</sup>に記載されている情報を参照し、必要に応じて加味した。

## 1890 年

8月6日、チェロとピアノのための〈歌 *Lied*〉を作曲した。

8月15日、6手のピアノのための〈ワルツ *Waltz*〉を完成させた。(6手のピアノのための作品は2曲あるが、第1曲のワルツがイワノフカで、2曲目の〈ロマンス *Romance*〉はモスクワで作曲された。)

夏には、チャイコフスキーの《眠れる森の美女》を4手のピアノ版に編曲した。

## 1891 年

6月18日に、ピアノ協奏曲第1番 *fis-moll* 作品1 (オリジナル版) の第1楽章のスコアを完成させた。  
(改訂版には、1917年11月10日の日付 (旧暦) と「モスクワ」の記載がある。)

7月6日までに、2楽章と3楽章を作曲した。2つの楽章は、6日までの2日半の間に作曲し、オーケストレーションを終えている。

7月20日、〈前奏曲 *Prélude*〉 *F-Dur* (作品番号なし) を作曲した。(この曲は、約半年後にチェロとピアノ用に編曲され、作品2の第1曲となった。)

また、7月には A. I. ジロティと、前年に編曲した《眠れる森の美女》を演奏した。(ジロティは、チャイコフスキーによる要請により、ピアノ独奏版の編曲を済ませていたが、4手版の編曲は、腕を怪我したためラフマニノフに依頼した。)

## 1894 年

8月、交響詩〈岩 *Utyos*〉の校正をした。

9月上旬に、〈ジプシーの主題によるカプリッチョ *Kartichchio na tsiganskiye temi*〉を作曲した。

## 1895 年

この年の1月にモスクワで開始されていた交響曲第1番の作曲の続きを行なった。

8月30日に、交響曲第1番のオーケストレーションを完成させた。

9月に、交響曲第1番を4手のピアノ用に編曲。15日に1楽章を終え、25日までに全楽章の編曲を終えた。(バルテンソンの伝記によれば、この編曲は1898年になされている。)

## 1901 年

9月に、ピアノ協奏曲第2番 *c-moll* 作品18の校正を行なった。(作品自体は、1901年4月21日 (旧暦) にモスクワで完成されている。)

## 1902 年

4月に、《12の歌曲》作品21の12曲のうちの11曲(1901年に作曲された第1曲を除く)作曲した。(1902年6月17 [30] 日付の N. S. モロゾフ宛の手紙によれば、彼はこれらの曲を急いで作曲し、

その後スイスのルツェルンで仕上げた。）

〈前奏曲〉作品 23 の 10 曲を作曲した。（B. V. アサフィエフが作成した作品表では、この作品は 1903 年作曲となっている。明らかに、ラフマニノフは 1903 年にこれらの作品を仕上げている。

### 1904 年

5 月 25 日から 7 月 30 日の間に、オペラ《フランチェスカ・ダ・リミニ *Francesca da Rimini*》作品 25 のヴォーカルスコアを書いた（1900 年に作曲したパオロとフランチェスカのデュエットを除く）。

### 1905 年

5 月から 6 月にかけて、オペラ《けちな騎士 *Skupoy ritsar*》作品 24 を作曲した。

6 月 9 日にオペラ《フランチェスカ・ダ・リミニ》のオーケストレーションを開始した。

### 1906 年

8 月 14 日から 9 月 17 日の間に、《15 の歌曲》作品 26 を作曲した。各曲の完成は下記の通り（日付順）。

8 月 14 日：第 1 曲 〈心の底にはあまたの響きが *Yest' mnogo zvukov*〉，第 3 曲 〈息がつけるでしょう *Mi otдохnyom*〉

8 月 15 日：第 2 曲 〈私はすべてを奪われた *Vsyo otnyal u menya*〉

8 月 22 日：第 4 曲 〈ふたつの別れ *Dva proshchaniya*〉，第 5 曲 〈行こう、かわいい女よ *Pokinem, milaya*〉

8 月 23 日：第 6 曲 〈キリストは起き上がりぬ *Khristos voskres*〉

8 月 25 日：第 8 曲 〈私は許しを乞う *Proshchadi ya molyu*〉

9 月 3 日：第 12 曲 〈夜は悲しい *Noch' pechal'na*〉，第 13 曲 〈昨日私たちは会った *Vchera mi vstretilis'*〉

9 月 4 日：第 9 曲 〈私はふたたびただひとり *Ya opyat' odinok*〉

9 月 6 日：第 11 曲 〈噴水 *Fontan*〉

9 月 8 日：第 15 曲 〈すべては過ぎ去り *Prokhodit vsyo*〉

9 月 9 日：第 7 曲 〈子供たちに *K detyam*〉

9 月 10 日：第 14 曲 〈指輪 *Kol'tso*〉

9 月 17 日：第 10 曲 〈私の窓辺に *U moyego okna*〉

### 1907 年

6 月から 7 月にかけて、M. A. スローノフから届いたオペラ《モンナ・ヴァンナ》（未完）の第 2 幕のテキストの短縮に取りかかった。

7 月、ピアノソナタ第 1 番 d-moll 作品 28 の短縮化（5 月に一度ドレスデンで最初の改訂を終えている。）

7月後半から8月にかけて、交響曲第2番（e-moll 作品27）のオーケストレーションを行った。

### 1908 年

7月、交響曲第2番のスコアとパート譜の修正を行った。

### 1909 年

5月末から6月上旬にかけて、交響詩《死の島 *Ostrov myortvikh*》作品29の出版のための修正を行った。  
夏に、ピアノ協奏曲第3番 d-moll 作品30を作曲した。

### 1910 年

夏に、ピアノ協奏曲第3番の修正を行なった。

6月21日頃に、混声合唱のための〈聖ヨハネス・クリュソストムスの典礼 *Liturgiya svyatovo Ioanna Zlatousta*〉作品31の作曲を開始し、7月30日に完成させた。

8月23日から9月10日にかけて、《13の前奏曲》作品32作曲。各曲の完成は下記の通り。

8月23日：第5曲 G-Dur, 第11曲 H-Dur, 第12曲 gis-moll.

8月24日：第7曲 F-Dur, 第8曲 a-moll.

8月25日：第6曲 f-moll.

8月26日：第9曲 A-Dur.

8月28日：第4曲 e-moll.

8月30日：第1曲 C-Dur.

9月2日：第2曲 b-moll.

9月3日：第3曲 E-Dur.

9月6日：第10曲 h-moll.

9月10日：第13曲 Des-Dur.

### 1911 年

8月11日から9月11日にかけて、《絵画的練習曲集 *Etudes-tableaux*》作品33を作曲した。各曲の完成は下記の通り。（ラフマニノフの希望により、第3、4、5番は作品33から省かれ、第4曲はのちに作品39として、また第3、5曲は1948年に初めて出版された。

8月11日：第1曲 f-moll.

8月13日：第9曲 cis-moll.

8月15日：第8曲 g-moll.

8月16日：第2曲 C-Dur.

8月17日：第7曲 Es-Dur.

8月23日：第6曲 es-mol, 第11曲 H-Dur.

9月8日：第4曲 a-moll.

9月11日：第5曲 d-moll.

## 1912 年

6月に、《14の歌曲》作品34のうちの12曲を作曲した。各曲の完成は下記の通り。

6月4日：第6曲〈ラザロの復活 *Voskresheniye Lazarya*〉.

6月6日：第1曲〈ムーサ *Muza*〉.

6月7日：第3曲〈嵐 *Burya*〉.

6月8日：第5曲〈アリオン *Arion*〉.

6月9日：第4曲〈そよぐ風 *Veter perelyotniy*〉.

6月10日：第10曲〈その日は私は覚えている *Sey den', ya pomnyu*〉.

6月11日：第11曲〈小作人 *Obrochnik*〉.

6月12日：第8曲〈音楽 *Muzika*〉, 第9曲〈あなたは彼を知っていた *Ti znal yego*〉.

6月13日：第7曲〈そんなことはない *Ne mozhet bit'*〉

6月17日：第13曲〈不協和音 *Dissonans*〉.

6月19日：第12曲〈何という幸せ *Kakoye schast'ye*〉

## 1913 年

6月から7月にかけて、詩曲《鐘 *Kolokola*》作品35を作曲した。作曲のプロセスは下記の通り。

6月10-15日：第1楽章.

6月25-30日：第2楽章.

7月2-17日：第3楽章.

7月19-27日：第4楽章.

7月10日頃に、ピアノソナタ第2番 b-moll 作品36を作曲した。

8月12日に、ピアノソナタ第2番 第1楽章を完成させた。

## 1914 年

4月末から5月にかけて、詩曲《鐘》における詩の配置を確認した。

## 1915 年

9月に、《6つの歌曲》作品38のうちの4曲を作曲した。各曲の完成は下記の通り。

9月12日：第1曲〈夜更けに私の庭で *Noch'yu v sadu u menya*〉, 第2曲〈彼女に *K ney*〉,  
第4曲〈ねずみとりの男 *Krisolov*〉.

9月（日にち不詳）：第3曲〈ひな菊 *Margaritki*〉.

ラフマニノフは、これらの歌曲の作曲を1916年6月にロシア南部のエセントゥッキで始め、9月にイワノフカで完成させた。

本稿は、上述した通り、エメリヤノヴァによる著作（1971 年）を基礎にもとにまとめたものである。イワノフカにおいて完成された作品だけでなく、イワノフカにおけるラフマニノフの創作過程にも焦点をあてることによって、ラフマニノフにとってのイワノフカの位置づけをより具体的に把握することができよう。

---

## 参考文献

- Antipov, Valentin Ivanovich. *Tvorcheskii arkhiv S. V. Rakhmaninova: Ukazatel' proizvedenii*. Tambov: Izdatel'stvo Pershina R. V., 2013.
- Bertensson, Sergei, and Jay Leyda. *Sergei Rachmaninoff: A Lifetime in Music*. Bloomington: Indiana University Press, 2001.
- Emel'yanova, N. N. S. V. *Rakhmaninov v Ivanovke: Sbornik materialov i dokumentov*. Voronezh: Knizhnoe izdatel'stvo, 1971.
- Norris, Geoffrey. "Rachmaninoff [Rakhmaninov, Rachmaninov], Serge." *Grove Music Online*. 2001; Accessed 4 Nov. 2021. <https://www.oxfordmusiconline.com/grovemusic/view/10.1093/gmo/9781561592630.001.0001/omo-9781561592630-e-0000050146>
- Threlfall, Robert, and Geoffrey Norris. *A Catalogue of the Compositions of S. Rachmaninoff*. London: Scolar Press, 1982.
- Val'sova, V. B. S. V. *Rakhmaninov: Letopis' zhizni i tvorchestva, Chast' 1, 1873-1899*. Tambov: Muzei-usad' ba S. V. Rakhmaninova «Ivanovka», 2017.
- バジャールノフ、ニコライ『ラフマニノフ—限りなき愛と情熱の生涯』小林久枝 訳、音楽之友社、1975 年。
- 安原雅之「『タイム』誌にみる、ラフマニノフと音楽ビジネス—1943-1948 を中心に」愛知県立芸術大学音楽学部音楽学コース紀要『ミクスト・ミュージズ』2014 年、Vol. 9、pp. 5-18.

---

## 註

- <sup>i</sup> (バジャールノフ 1975: 352)
- <sup>ii</sup> Geoffrey, Norris. "Rachmaninoff [Rakhmaninov, Rachmaninov], Serge." *Grove Music Online*. 2001; Accessed 4 Nov. 2021.
- <sup>iii</sup> 詳細は、拙論（安原 2014）を参照されたい。
- <sup>iv</sup> (Emel'yanova 1971: 266-271)
- <sup>v</sup> (Threlfall 1982)
- <sup>vi</sup> (Bertensson and Jeyda 2001)

## 執筆者

安原 雅之（音楽学部作曲専攻音楽学コース 教授）